

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：17601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23792651

研究課題名(和文) 遺伝医療における職種間連携を担う看護職の学習支援のための基礎的研究

研究課題名(英文) A study of learning support for Nurses in cooperation between occupations in medical genetics.

研究代表者

水畑 喜代子 (Mizuhata, Kiyoko)

宮崎大学・医学部・講師

研究者番号：40346242

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、遺伝医療における職種間連携を担う学習支援を目的に、遺伝医療に関する看護職の学習ニーズを明らかにした。

調査の結果、看護師・助産師・保健師の看護職種によって学習支援のニーズは異なっていた。すべての看護職において「看護教育における遺伝医療の学習内容の乏しさ」「遺伝医療に関するアセスメント力不足」「遺伝医療のニーズに対応するケア提供力の不足」「遺伝医療に関する学習機会の乏しさ」が課題として共通していた。助産師では「出生前検査における倫理的葛藤」、保健師では「地域住民の遺伝医療に関する連携と協働」に関し学習ニーズが高かった。これらから遺伝医療に関わる看護職に学習ニーズに関する示唆を得た。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify learning support for Nurses in operation between occupations in medical genetics.

Results of the investigation, the needs of the learning support by nursing job of nurses and midwives, public health nurses was different. In all of the nurses "poor of learning the contents of the genetic health care in nursing education", "genetic medical assessment related to shortages," "lack of care provided force to meet the needs of genetic medicine," "poor of learning opportunities related to genetic medicine." There had been common as an issue. A midwife "ethical conflict in prenatal testing", had higher learning needs relates to "cooperation and cooperation on genetic medical local residents" in the public health nurse. From these nurses involved in genetic medicine was obtained suggest about learning needs.

研究分野：遺伝看護

キーワード：遺伝看護

1. 研究開始当初の背景

ゲノム解析の進歩とともに、医療の現場においてゲノム解析で得られた遺伝学的情報を活用した遺伝医療が行われている。遺伝学的情報は、生涯変化しない、未来を予測しうる、血縁者と共有する、といった特性を持ち、倫理的な問題も関与しうることから、慎重な対応を求められる。遺伝性疾患の患者もしくはその関係者の疑問・不安を解決し、意思決定を行えることをめざし、遺伝カウンセリングが行われているが、臨床遺伝専門医、認定遺伝カウンセラーなどは少数であり、各診療科の医師、臨床心理士、地域の保健師と連携しながら、看護師は遺伝カウンセリングや遺伝医療に関わっている現状がある。しかし、看護基礎教育の中で遺伝看護をカリキュラムに取り入れている教育機関はごく僅かであり、修士課程においても数校のみである。国内外での有資格者に対する遺伝看護教育プログラムの検討(守田, 2006; Burke, 2006) や遺伝看護実践に関するワークショップが行われているが、その機会は少なく、遺伝医療に関わりながらも学習支援を望む看護職は多いと考えられ、また様々な遺伝性疾患があることから多岐にわたる診療科や専門職との連携が必要とされている。

2. 研究の目的

遺伝医療における職種間連携を担う学習支援を目的に、遺伝医療に関する看護職の学習ニーズを明らかにする。

3. 研究の方法

(1)文献調査

遺伝医療における看護職の学習ニーズを明らかにするための予備的検討として、遺伝医療における看護支援の現状について、PubMed, CINAHL, PsychINFO, 医学中央雑誌を用い、過去 10 年間の文献を検索した。検索によって得られた文献について、遺伝医療に関わる看護職の役割・機能を抽出し、記述的に分析した。

(2)ヒアリング調査

地域の看護職能団体の研修会に参加した看護職者(看護師、助産師、保健師)7名に対し、遺伝医療における看護実践上の課題と求める学習支援についてフォーカスグループおよび個別のインタビューを実施した。得られたデータから逐語録を作成し、分析データをコード化した。その後、サブカテゴリー、カテゴリーとして抽象化を行った。

4. 研究成果

(1)文献調査

文献調査では、検索式により、Pubmed では 392 件、CINAHL では 8 件、PsychINFO では 32 件、医学中央雑誌では 35 件が得られた。重複文献を削除後、選択基準、除外基準に従って文献を削除し、得られた文献のアブストラクトについて同様の作業を行い、最終的に 21

件の文献を検討の対象とした。対象とした文献について本文を通読し、「研究対象者」「研究の行われた国」「研究方法」「対象者数」「分析方法」「遺伝医療の内容」「看護支援の内容」「クライアントのニーズ」などについて内容を要約し、その類似性に従って分析した。

遺伝医療の内容については、出生前診断、家族性腫瘍、神経・筋疾患、血液・凝固系疾患についての診断、治療に関するものが抽出された。看護支援の内容については、正しい遺伝情報の提供、遺伝情報についての理解の支援、疾患の特性に応じた社会資源の情報提供、家族内での遺伝情報の共有に関する相談、他職種との連携、などが抽出された。クライアントのニーズについては、検査・診断・告知後の精神的支援、正しい遺伝情報の提供、相談先の確保、社会資源の情報提供、などが抽出された。遺伝情報が、クライアントの婚姻や出産、家族関係に影響を与える可能性について指摘されており、エスニックグループによる遺伝医療の利用や受診態度に差異がみられ、文化や価値観との関連があることが示唆された。

(2)ヒアリング調査

地域の看護職能団体の研修会に参加した看護職者(看護師、助産師、保健師)7名を対象に、遺伝医療における看護実践上の課題、求める学習支援についてフォーカスグループおよび個別のインタビューを実施した。対象の属性は表 1 の通りである。

得られたデータから抽出された対象となる分析データは 379、コード数は 108、サブカテゴリーは 32、カテゴリーは 12 であった。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを<>、コードを<>、データを「」として示す。

すべての看護職において共通して抽出されたカテゴリーとして【看護基礎教育における遺伝医療の学習内容の乏しさ】が抽出され、<染色体の異常が起こるメカニズム>や<遺伝形式>など《遺伝に関する生物学的知識》や、<先天性疾患>や<希少性難治性疾患>などの《遺伝性疾患の知識》、《遺伝子診断の知識》を系統的に習得できていないことを課題と感じていた。

看護上の実践においては、前述の課題から《家系図の作成》を行うことや、《クライアントの抱える問題》《クライアントのもつ遺伝性疾患のイメージ》の明確化を図る上での【遺伝医療に関するアセスメント力不足】を感じていた。

また、《検査・治療上の意思決定支援》の難しさ、遺伝情報は生涯変化しないことから生涯にわたる《クライアントとの生活に根差した支援》、検査の受検および診断の告知に関わる《カウンセリング》能力が求められており、精神的な支援をはじめとした【遺伝医療に対応するケア提供力の不足】を課題として認識していた。これらには《家族間で共有

される遺伝情報》や《家族間で共有できない遺伝情報》といった《プライバシーの保護》について、個々のクライアントのケースに応じた対応が求められ、また正しい知識をもちクライアントや家族の《遺伝情報の誤った理解》に対応する【遺伝情報の取り扱い】の難しさが関連していた。

遺伝性疾患は《世代を超えて引き継がれる疾患》であり、その＜疾患を伝える可能性がある＞ことからクライアントがもつ《疾患を次世代に伝える罪責感》への対応をする看護職自身が【遺伝性疾患の特性に対する戸惑い】を感じていた。

クライアントのニーズに合わせて《医師と患者の橋渡し》を行い、また《クライアントと家族の調整》の必要性を感じていたが、家族内で遺伝情報を引き継ぐ可能性の有無により《家族間の意見や感情の違い》や、検査や診断・治療に対する《家族間でのニーズの違い》がみられる場合もあり、【クライアントの権利擁護】に対する慎重な対応の必要性を感じていた。

《遺伝に関する倫理》や《進歩する遺伝医療》に対応する試みとして《学習会の参加》や《遺伝カンファレンスの参加》を行っていたが、系統的な遺伝医療の知識を習得する【遺伝医療に関する学習機会の乏しさ】を課題として認識していた。

遺伝性疾患は、《複数の診療科での治療》やフォローアップが必要であり、看護職として【他診療科との協働】や《治療や検査に関わる多職種》をコーディネートする能力や【多職種との協働】が求められていると認識していた。

看護職でも、職種により抽出されたカテゴリーに特徴がみられた。研究期間内に、無侵襲的出生前遺伝学的検査の新聞報道および臨床研究が開始されたこともあり、助産師からは《妊娠・出産に関する相談》や《出生前検査受検の相談》の増加を感じており、＜出生前検査の目的＞＜出生前検査の結果＞からクライアントが悩み考慮する《妊娠中絶の選択肢》に対する【出生前検査における倫理的葛藤】が抽出された。

保健師からは、《地域住民からの遺伝相談》を受け、医療機関や遺伝性疾患患者会と連携する《相談先の確保》を行い【地域住民の遺伝医療に関する連携と協働】図りつつも、【限られた社会資源】であり、体制づくりの課題があげられた。

調査の結果、看護師・助産師・保健師の看護職種によって学習支援のニーズは異なっていた。すべての看護職において「遺伝医療に対するとまどい」「看護基礎教育における遺伝医療の学習内容の乏しさ」「遺伝医療に関するアセスメント力不足」「遺伝医療のニーズに対応するケア提供力の不足」「遺伝医療に関する学習機会の乏しさ」が課題として共通していた。助産師では「出生前検査における倫理的葛藤」、保健師では「地域住民の

遺伝医療に関する連携と協働」に関し学習ニーズが高かった。これらから遺伝医療に関わる看護職に学習ニーズに関する示唆を得た。

表1 対象の属性

	人数	
看護師	3	
助産師	2	
保健師	2	
	年	
平均年齢	30.4	(SD = 6.2)
経験年数	6.4	(SD = 3.5)

(3) 遺伝看護学習会の開催

所属機関の学内および附属病院看護職、また県内の看護職を対象に、遺伝看護・遺伝カウンセリング研修会を開催した。第1回目は「出生前検査を考慮する女性への支援の実践報告および新しい出生前診断」について取り上げた。第2回目は「胎児に何らかの先天異常が見つかった女性および家族の理解」と「障害をもつ児を育てる家族に対する地域支援体制」について取り上げ、学習機会の提供および看護職のネットワークづくりを行った。

今後、研究成果を踏まえた学習会を行う同時に、関連職種を講師として迎え多職種協働の学習会となるよう発展させることが今後の課題である。

<学習会プログラム>

遺伝看護・遺伝カウンセリング 勉強会のご案内

宮崎大学医学部附属病院
遺伝カウンセリング部

遺伝カウンセリング部では、看護スタッフによる遺伝看護、遺伝カウンセリングに関する勉強会をおこなっています。

遺伝カウンセリング部では出生前検査に関する相談も多く、今年の4月から新しい出生前検査の臨床研究が始まり、解析結果の報道等もなされ、社会的関心も高まっています。

胎児に先天異常が見つかった女性と家族は出生前検査受検後に、その後の妊娠継続に関する意思決定を迫られます。その状況の中で、妊婦と家族が意思決定をするためのケアを考えることは重要であり、またそのために地域で障害をもつ児を育てる家族への支援体制の理解が欠かせません。

今回は、胎児に何らかの先天異常が見つかった女性へのケアについての勉強会を企画しました。このテーマについて一緒に考えてみませんか。皆様のご参加をお待ちしております。

1回目
日時：2014年1月8日（水）16時～17時
場所：附属病院4階共通多目的ルーム
内容：胎児に何らかの先天異常が見つかった女性および家族の理解（担当：水畑）
 障がいをもつ児を育てる家族に対する地域支援体制（担当： ）

<お問い合わせ先>
 宮崎大学医学部附属病院遺伝カウンセリング部
 医学部看護学科 小児・母性看護学講座
 水畑 昌代子 （内線：2831）

5．主な発表論文等

〔学会発表〕(計 1 件)

山口昌俊、水畑喜代子、永瀬つや子、野間口千香穂、長谷川珠代、藤井加那子、鮫島浩
当科における羊水染色体検査と遺伝カウンセリング、第 37 回日本遺伝カウンセリング学会学術集会、2013 年 6 月 20 日-23 日

6．研究組織

(1)研究代表者

水畑喜代子 (KIYOKO MIZUHATA)

宮崎大学・医学部・講師

研究者番号：40346242